

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑧

マルコ・ポーロの道しるべ

緋月 まや

人はどうして旅に出たくなるのだろうか。ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロは十七歳の時、父親についてアジアへの旅を開始したという。今から七百五十年前のことだ。ラクダに乗ってパミール高原を越え、ゴビ砂漠を越え、中国を征服したモンゴル帝国「元」を目指した。秀でた語学の才能から時の皇帝クビライに役人として重用され、やがてはその特使として中国各地や東南アジア各国を歴訪することになる。船に乗ってインドを経由し、再び母国に戻ったのは二十四年後のことだ。その壮大な旅の中で記憶に焼きついたアジア諸国の情景を口述したものがかの有名な『東方見聞録』で、日本は「黄金の国ジパング」として登場する。世界の東の果てにある小さな島国がヨーロッパ諸国に紹介された歴史的瞬間だ。ジパングとは中国語で「日本国」を発音したものだとして、今なおジャパンと呼ばれる所以である。実際には、マルコ・ポーロは日本の地に足を踏み入れておらず、当時の中国で噂話として広まっていた「黄金の国」を語ったに過ぎないのだけれど。いずれにしても、『東方見聞録』は聖書に次いで世界中の言葉に翻訳された書物であるというから、大変なベストセラーだった訳だ。人間とは、それほどまでに知らない土地に憧憬を抱く生きものなのである。

*

糸の切れた凧が風に吹かれるようにして日本を発ち、私がトスカーナにたどり着いたのはもう四

年も前のことになる。フィレンツェという旅先で暮らしながら、なお旅心が尽きることはなく、イタリア各地を歩き回った。



【アルバのトリュフ国際見本市】

二年前のちょうど今頃は、片道五時間をかけて北部ピエモンテ州アルバのトリュフ市に出かけた。秋の味覚といえば、日本では松茸だが、イタリアではトリュフなのである。ポーチド・エッグやパスタの上にスライスして、その香りを楽しむ。なかでも、白トリュフは世界中でイタリアの中部以北でしか産出されないため稀少価値が高い。その代表的産地がアルバで、秋になると国際的なトリュフの見本市でにぎわう。会場では、見たこともないような数のトリュフがまるで宝石みたいに透明のケースの中に敷き詰められていて、小ぶりなもので数千円から、大ぶりになると何万円もした。じっと眺めていると、販売者の男性がひとつを取り出して

くれた。得も言われぬ芳香を期待したのだが、さほどでもない。なのに非常に高額なのである。これでは品の良し悪しを判断する基準がわからない。残念ながら素人が気軽にできる買い物ではなさそうだった。

しかし、アルバで楽しむべきものはトリュフだけではない。ピエモンテは、トスカーナと双壁をなすイタリアワインの銘醸地だ。端的に違いを言えば、原料となる葡萄の品種が異なる。トスカーナ土着のサンジョベーゼがイタリア各地で広く根づいているのに対し、ピエモンテ土着のネッピオーロはその地でしか育たない。前者が他品種とのブレンドによってその風味を醸し出すワインであるのに対し、後者はネッピオーロ品種だけで作りあげる。ワインという鏡に、それぞれの地域の特性が映し出されているようでおもしろい。トスカーナはルネサンスの都、すなわち芸術の都として名高いフィレンツェを州都に掲げ、そこは同時に中世以降の一時代、大富豪メディチ家を筆頭とする金融業で潤ったヨーロッパ随一の商業都市でもあった。常に多国籍の商用客や旅客が交じり合って発展してきた地域である。一方、ピエモンテはといえば19世紀後半のリソルジメント(イタリア統一運動)を経て現在のイタリアの前身であるイタリア王国が建国されるまでは、フランス南東部を中心とするサヴォワ地方の貴族サヴォイア家の支配下にあった。そのためフランスの影響を色濃く残している。

たとえば、「バローロ」がそうだ。ピエモンテワインの顔であり、イタリアワインの王とも称される銘酒であるが、バローロとその周辺の村で生産されたものだけがその名を名乗ることを許される。昔は甘いワインだったそうで、現在の深みある辛口に変わっていくのはイタリア王国初代首相カミッロ・カヴールがフランスの醸造家レイ・ウダールを招き、最新の醸造技術を導入して以降のことである。1980年代になると、「バローロ・ボーイズ」と呼ばれた若き生産者たちが革命を起こす。飲み頃になるまでに十年以上かかる「バローロ」をもっと早く味わえるようにと、バリック(小樽)を使った醸造法を提唱するのだが、これもフランスのブルゴーニュから学んだものであった。そもそもが、一品種の葡萄だけからワインを醸造するという哲学

はブルゴーニュで極められたものである。樽香と果実味を楽しむ「モダン派」と、大樽で長期熟成させることによって一層重厚な味わいを醸し出す「伝統派」。切磋琢磨の結果、今日では「折衷派」が多くなっている。



【ユニークな博物館が目を引くバローロの街並み】

さて、「バローロ」が王ならば、「バルバレスコ」は女王と称される誇り高きワインだ。やはり、バルバレスコとその周辺の村でしか醸造を許されない。規定の熟成期間は「バローロ」より一年短い。アルバのトリュフ市には、ピエモンテワインの生産者たちがご自慢の「バローロ」や「バルバレスコ」を携えて試飲ブースを連ねていた。こんな夢のような機会はまたとない。ブースを渡り歩き、三十種類を飲み比べたのだが、「バローロ」にしても「バルバレスコ」にしても、それぞれの生産者が独自の醸造方法にこだわっているとあって、種類の葡萄だけでつくられたワインとは思えないほどに味わいが違った。熟成期間が短くても「バローロ」より重厚に感じられる「バルバレスコ」もあれば、その逆もあった。どちらが王で、どちらが女王なのか。何がなんだかさっぱりわからない。ネッピオーロという深い森の奥で、すっかり道に迷ってしまったような気分になった。

翌日、私はバルバレスコに向かった。アルバからは車で十五分ほどの距離だ。窓の向こうには、その景観が世界遺産に登録されている美しい葡萄畑が続いた。ところが、車を降りてみれば、バルバレスコのまちは想像に反して驚くほど小さく地味だった。バローロには、これより先に一度訪れたことがあるのだが、立ち並ぶエノテカは観光客でにぎわい、ワイン博物館やワインオープナー博物館といった見応えある施設も整備されていた。しかしここには、レストランやバーがぼつりぼつりと点在してはいるものの、土産品店もなければスーパーもない。商売気というものがなさすぎる。

これが本当に女王のまちかと疑いたくもなかったが、いざバーに入店してみると、やはりすごい。こともなげに、イタリアワイン界の帝王「ガヤ」の「バルバレスコ」がグラスで置いてある。このクラスのワインはボトルが置いてあることはあっても、グラスで飲ませてもらえることはまずない。高価であるが故に、開栓しても本来の風味を保っているうちにさぼくことが難しいからだ。実際、最も安価な2016年でも一杯40ユーロ(当時五千円相当)、1998年という年代物になると90ユーロ(当時一万二千円相当)で販売されていた。イタリア切っのトップワイナリーが本拠地を構えるバルバレスコならではの光景といえる。さらによくまちを覗いてみれば、中心部に建っている教会もすごかった。地域公共のエノテカとして使われているのだが、「バルバレスコ」の宝庫として圧巻の眺めである。

まちを離れ、葡萄畑に沿って半時間ばかり歩いていくと、「ブルーノ・ロッカ」というワイナリーを見つけた。一枚の鳥の羽が優しい線で描かれた、シンプルなデザインのワインラベルに惹かれるものがあった。鳥の羽はペンに見立てているとのことで、ひとつひとつのワインにひとつひとつの物語を描いていきたいとの思いが込められていた。上質を探求するすべての生産者に共通の思いかもしれない。三種類の「バルバレスコ」を試飲させてもらい、一番若い2017年を一本買った。決して、一番安かったからではない。軽やかさの中に感じられる複雑な風味の広がりや自分の好みに合っていたからだ。やっと、記憶に残る味に出会えた。この味わいをベースに、重さ、軽さ、酸味、渋みを比較していけばいい。闇に包まれたネッビオーロ

の森で、少し視界が開けた気がした。自分自身の基準を持つこと、それは、道に迷った時、どちらに進めばいいのかを判断するための第一歩だ。



【鳥の羽が描かれた「バルバレスコ」を試飲】

*

『東方見聞録』の愛読家のひとりが、ジェノヴァ出身の探検家クリストファー・コロンブスだった。「黄金の国ジパング」に到達すると信じて航路を取ったところ、アメリカ大陸を発見することになったという。マルコ・ポーロの旅行記はこうして、その初版から百五十年の時を超えて始まるヨーロッパの大航海時代に影響を与え、世界史を大きく動かした。旅とは偉大なものだ。マルコ・ポーロの語録に「旅は私の学校だ。自分の目で見て自分の頭で考える」とある。ヨーロッパとは何もかもが異世界だった当時のアジアの暮らしの中で、マルコ・ポーロはきっと、自分とはいったい何者であるのかを問い続け、生まれ変わっていく日々を愛していたのではなかっただろうか。母国を離れ、異文化の中に身を浸らせることで見えてくる自分がある。私自身もまた、そんな自分探しの旅の途上にある。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

* B級のマネッティ・ブラザーズが 撮影した「本物」の映画 *

二宮 大輔

私が参加している京都ドーナツクラブという団体で、毎年イタリア映画の上映会を開催しているのだが、今年も11月に京都、東京、オンラインで上映会を開催することになった。今年のテーマはマネッティ・ブラザーズ(Manetti Bros.)だ。「イタリアB級映画、最新にして最高峰」という副題をつけて、この兄弟監督の特集上映を企画した。

兄弟監督といえば、タヴィアーニ兄弟を思い出される読者も多いかもしれないが、現代イタリアの兄弟監督といえばマネッティ・ブラザーズだ。それほどまでに、国内では勢いに乗っている。



【アントニオ・マネッティ(左)とマルコ・マネッティ(右)】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Manetti_Bros.

兄のマルコ・マネッティは1968年生まれ、弟のアントニオ・マネッティは1970年生まれ。生まれ育ったローマを拠点に、90年代から様々なミュージシャンのプロモーションビデオを制作し、2000年代に入るとホラーやSFなどのジャンル映画を撮り始める。2013年、ナポリを舞台にした警察アクション『僕はナポリタン』(Song 'e Napule)で注目を集め、2018年にミュージカル風ギャング映画『愛と銃弾』(Ammore e malavita)で国内最大の映画賞ダヴィッド・ディ・ドナテッロの最優秀映画賞を獲得した。そして2021年、正体不明の怪盗を主

人公にした人気長寿漫画『ディアボリック』(Diabolik)を映画化して、改めて注目を集めている。

話題作『ディアボリック』を、11月の特集上映の準備のために初めて鑑賞して、衝撃を受けた。なぜならそれが、マネッティ・ブラザーズ特有のB級映画感のない、「本物」の映画だったからだ。この衝撃を共有してもらうために、マネッティ・ブラザーズの足跡をたどってみたい。

*

1990年代にロックバンドや女性シンガーのプロモーションビデオを撮影し始めたマネッティ・ブラザーズだが、最も彼らの特徴が色濃く出ているのがヒップホップのプロモーションビデオだ。

例えば2002年に発表された同郷のラッパーのピオッタ(Piotta)の楽曲『大きな波』(La grande onda)のビデオが面白い。

刑事役のピオッタが覆面強盗グループの正体を追っている。犯行現場に残されたサーフボード用のワックスから、犯人たちがサーフィンをすると推測した刑事は、サーファーのふりをして潜入捜査を開始する。覆面をしていない状態でサーフィンを楽しんでいた強盗グループのもとに行き、ピオッタが自分のサーフィンの腕前を披露する。ところがあまりの下手くそぶりに強盗グループにからわれてしまう。そんななか、グループの紅一点ヴァリーだけが、ピオッタに優しくサーフィンの手ほどきをしてくれる。

そうこうしているうちに、グループと仲良くなったピオッタは、彼らとともに覆面をして次なる強盗に出かける。海辺のバーに押し入った強盗グループがレジの現金を奪おうとしたその瞬間、自分が警察であることを明かして、前もって潜伏していた刑事の同僚とともに、強盗グループを一網打尽にする。一人逃げ延びたヴァリーを追うピオッタ。行く手に先回りして捕まえるが、覆面を脱いだ彼女を見て、逮捕するのをやめて二人で仲良くサーフィンをするのだった。

タイトルの通り、波とサーフィンをテーマにしており、カトリーヌ・スパークが歌った1964年のヒット曲『サーフ軍団』(L'esercito del surf)を元ネタにしたトラックに、疾走感のあるラップが絡み合う。

この波は決して俺を沈めないだろう
Mai quest'onda mai mi affonderà,

サメが俺を捕らえることはないだろう
Gli squali non mi avranno mai.

この波は決して俺を沈めないだろう
Mai quest'onda mai mi affonderà

シャラララ シャラララララ もう一回もう一波
Sha la la la la sha la la la la, un'altra
volta un'altra onda.

シャラララ シャラララララ どれだけ耐えられ
る?
Sha la la la la sha la la la la, quanto
resisterai?

歌詞や楽曲の面白さを増幅させるストーリー展開、3分半ほどの楽曲でこのストーリーを台詞なしで理解させる簡潔さはさすがの一言だ。だが、注目したいのは顔を隠すために使われるマスクが、シルヴィオ・ベルルスコーニ、マッシモ・ダレーマを始めとする当時の主要政党のリーダーたちの顔になっているところだ。そのマスクをかぶった強盗たちが、物語の最後に次々と逮捕されていくわけだから痛快だ。実はこの覆面強盗には元ネタがある。1992年のハリウッド映画『ハートブルー』(Point Break)だ。本家は歴代アメリカ大統領のマスクをかぶり強盗を遂行する。つまり『ハートブルー』とローマのラッパーという、交わるはずのない二つの世界をつなぎ合わせて見せたところが、最高の発明であり、この映像作品の最大の面白味になっている。そしてそれこそがマネッティ・ブラザーズの最大の特徴なのだ。

*

このようなプロモーションビデオの特徴をそのまま映画に移行させたのが、『大きな波』のリリースとは前後するが、2000年に公開された彼らの長編映画第一作『吸血鬼ゾラ』だ。

時は2000年、ルーマニアのトランシルヴァニア地方に住むドラキュラ伯爵がイタリアに憧れて、移民たちとともにイタリアへ密入国して、ローマで

グラフィック・ライターの女性と運命的な出会いを果たすという異色のホラー映画だ。2000年代初頭のイタリアでは、増加するルーマニア人移民が問題となり始めたところで、2001年に約7万5000人だったルーマニア人移民は2010年まで増加し続け、2020年には100万人を数えるまでになっている。いっぽう世界的に有名な吸血鬼ドラキュラ伯爵が住んでいたとされているのも、現在のルーマニアだ。それならドラキュラをイタリアに来るルーマニア移民のなかに混ぜてしまおうという発想は、まさしく『大きな波』のそれと同じだ。



【吸血鬼ゾラ】

さらにドラキュラが辿り着いた先がローマの社会センター(Centro sociale)というところも面白い。主要都市に点在する社会センターというのは、その名前とは裏腹に、使われなくなった建物などを占拠し、コンサートやイベントを企画したり、バーやレストランを出店したりする、よく言えば新しい文化の発信地、悪く言えば怪しい若者たちの溜まり場だ。『吸血鬼ゾラ』でも、度々社会センターの入口に座り込んで、ろれつの回らない男女が登場するが、そういった場所だ。危険なイメージは否定できないが、ここでヒップホップを始めとする新しいカルチャーが培われたこともまた事実である。そんな場所に、なんの関連性もないドラキュラが登場する。ホラー映画のはずが、自ずとその空気感は、どこかふざけているような、B級映画のようになる。

*

2000年以降、プロモーションビデオ制作と並行して、マネッティ・ブラザーズは映画撮影を重ね、評価が高まるにつれて、作品もどんどん豪華になっていった。だが、その根底の「面白味」の部分は変わらずあったように思う。そこにきて2021年の

『ディアボリック』である。冒頭でも述べたが、人気漫画の映画版で、かなり忠実に漫画のストーリーと雰囲気再現している。

時は1960年代、ヨーロッパのどこかを思わせる架空の国クレルヴィル。怪盗ディアボリックは、その正体を隠し、恋人のエリザベス・ゲイとともに郊外のお屋敷で暮らしている。彼が目をつけたのは富豪の夫を亡くした未亡人エヴァ・カントが所有する希少なダイヤモンドだ。敏腕警部ジニコはそれを阻むべく、ディアボリックを追跡する。警察の目をかいくぐってエヴァの泊まる豪華ホテルの部屋に忍び込んだディアボリックだったが、彼の存在にまったく動じないエヴァからダイヤモンドが偽物であると聞かされる。

ダイヤモンドを奪うというごくシンプルな怪盗物語なのだが、その映像からは、おそらくは高い機材で撮影したのだろう、ヴィンテージの映画の質感が感じ取られる。そして主演のディアボリックを務めたのは、今もとても人気のある俳優ルカ・マリネッリ、ヒロインのエヴァ・カント役は元ミス・イタリアのミリアム・レオーネ、警部ジニコ役はベテラン俳優のヴァレリオ・マスタンドレアだ。すでに三部作であることが公表されており、続編二作も撮り終えたと聞く。なんと続編には大女優モニカ・ベルッチも登場するらしい。つまり、明らかに世界中で売れる気満々の映画なのだ。そこにマネッティ・ブラザーズ特有の面白味は介在しない。



【ディアボリック】

彼らはここで紹介した『大きな波』や『吸血鬼ゾラ』だけでなく、ごくまっとうな刑事もののTVドラマや、プロモーションビデオも撮ってきた。だから『ディアボリック』に関しては、マネッティ・ブラザーズの「職人」的な部分が前に出た作品と言えるかもしれない。しかしそれにしても、この大作を鑑賞

して、ローマで、社会センターを中心とする地域のカルチャーシーンを担っていた彼らが、ついに全世界の人々を対象とするような映画をつくってしまったのかという衝撃を受けたのだった。

元ネタをふんだんに盛り込んだ作風から、イタリアのクエンティン・タランティーノと見られる向きもある。だがそうなってくると、職人に徹するのではなく、持ち前のB級の面白味を出すことも欠かせないのではないだろうか。マネッティ・ブラザーズが世界で認められるかどうかは、そこにかかっていると個人的には思っている。

マネッティ・ブラザーズ特集上映の詳細はこちらをご覧ください。

<https://manettibroscinemafest.jimdosite.com/>

(翻訳家、元当館語学受講生)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoomを使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです!

- ・関西圏以外や外国にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
- ・外出を控えられている方

受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357
E-mail: center@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>